支援機器等教材活用実践事例フォーマット

実践年度・タイトル		令和元年度 相手に伝わるやり取りをしよう
授業について	教科名等	□国語　□社会　□算数/数学　□理科　□生活　□音楽　□図画工作/美術　□家庭/技術・家庭　□体育/保健体育 □特別の教科　道徳　□外国語/外国語活動　□総合的な学習の時間　□特別活動　■自立活動　□各教科等を合わせた指導 ■その他の教科（生活単元学習）　■その他（朝の会、休み時間）
	単元・題材名	自分から依頼してみよう
	授業の目標	・自分の思いや要求を、50音表などで単語や文を構成したり、登録したせりふを音声変換したりして、相手に伝える。 ・自分の要求や気持ちを入力し、音声変換して発信することで、自分の思いが相手に伝わるという経験を増やす。
	学力の3要素	■「知識及び技能」　■「思考力・判断力・表現力等」　■「主体的に学習に取り組む態度」
学習集団と子供の実態	学校・学部・学年・人数	□通常の学級　□通級による指導　□特別支援学級　■特別支援学校 □就学前　□小学生　■中学生　□高校生以降 □特定されない （　1　）年（　1　）人
	対象の障害	□視覚障害　□聴覚障害　■知的障害　□肢体不自由　□病弱・身体虚弱　□言語障害　□自閉症 □情緒障害　□LD（学習障害）　□ADHD（注意欠陥/多動性障害）　■その他（脳性麻痺による四肢の不自由さ）
	子供の困難さ	□見ること　□聞くこと　■話すこと　□読むこと　■書くこと　■動くこと　■コミュニケーションをすること　■気持ちを表現すること □落ち着くこと・集中すること　□概念（時間、大きさ等）を理解すること　□学習（計算、推論等）すること　□その他 ・発声はあるが、発語はない。 ・大人との関わりを好み、気になることや、教師に答えてほしいことなどがあると、発声や指さしなどで伝えようとするが、求めていることの具体的な内容までは相手に伝わらないことが多い。 ・ボタンを押すと音声変換ができるおもちゃの50音表を以前から使用しているが、1文字1文字ずつ入力するのが手間であり自分からはなかなか使おうとしなかったり、伝えたい言葉を省略して伝えたりするため、やり取りの手段としてはあまり有効に使えていない。
支援機器等教材の活用について	活用の意図	Aコミュニケーション支援（■A1意思伝達支援　□A2遠隔コミュニケーション支援） B活動支援（□B1情報入手支援　□B2機器操作支援　□B3時間支援） C学習支援（□C1教科学習支援　□C2認知発達支援　□C3社会生活支援） D実態把握支援（□D1実態把握支援） ・おもちゃの50音表よりも、より人の会話のように聞こえるアプリを使うことで、会話の代わりにしていきたいと考えた。 ・日常的によく使うせりふを登録できるアプリを使用し、簡単に自分の要求や思いを相手に伝えられることで、本生徒の「正しく、分かりやすく伝えると、相手に自分の思いがちゃんと伝わる。」という経験を積ませたい。
	使用した支援機器等教材の名称と画像	支援機器：iPad アプリケーション：かなトーク しゃべって
授業展開	授業展開・支援の手立て	要求がある場合（指さしや発声、ボディタッチなどで教師に伝えてきたとき）に、「かなトーク」や「しゃべって」で50音入力して、それを音声変換して相手に伝える練習を行った。よく使う要求（「むぎちゃをいれて」「トイレにいきたい」など）は、「しゃべって」に登録しておき、それを再生して伝えるようにした。 朝の会や個別の課題学習のときに、よく使う挨拶や言葉（授業名や天気など）を50音表で打ち込む練習を行った。本人の気持ちを確認する際や、簡単な教師からの質問(「今日の給食で好きな物は。」「頑張りたい授業は何。」「お休みにどこに行ったの。」など)に、「かなトーク」「しゃべって」で入力して答えたり、会話のようにやり取りを繋げたりする場を持つようにした。 クラスや合同授業などの全体の場で発表をする際に、「かなトーク」「しゃべって」で入力し（もしくは事前に登録しておき）、それを音声変換して、多くの人に伝わるようにした。iPadアプリを使用して、本人の思いが直接伝えられるようになったことで、教師が代弁していたときよりも、周りの生徒や教師から「Kさんは、〇〇が好きなんだね。」「〇〇を頑張ったんだね。」というような反応や言葉が返ってくることが多くなった。自分から発信することで、周りから反応が返ってきたことは、本生徒自身とても嬉しそうであった。せりふを登録して再生することで、授業の挨拶や簡単な進行の仕事にも取り組めるようになった。発語がないため、周りの生徒や教師から「挨拶や進行の仕事などは難しい。できない。」と思われがちだった本生徒が、アプリを使用していろいろなことを自分から発信できる様子が周りの人に理解されるようになった。その結果、いろいろな役割に充ててもらえたり、挑戦してみたりする機会が増えた。
効果・評価	子供の様子や変容および授業の評価	お茶を飲みたいときには、自分からiPadを持ってきてアプリを開き、それを使用して要求するようになった。手元にiPadがあると、思ったことや気になったことをアプリで音声変換して伝えてくることが増えた。発表の場で、生徒の思いなどが多数の人に伝わるようになった。家庭では電子音が苦手で、コミュニケーションアプリは使用していないとのことであったが、慣れてきたこともあるのか、学校では抵抗なく使用できている。 濁音や破裂音、拗音に変換するボタンが同じであるため、1回押したら濁音、2回押したら破裂音、3回押したら拗音になるという使い分けが難しい。間違ってボタンを押したときに、打ち直しに時間が掛かる。生徒からの発信は、指さしや発声で伝えてくることが多いが、常に生徒の手元にiPadがあるわけではない。また、ふと思い立ったことを伝えるには50音入力が生徒にとって手間なのではないかということや、iPadアプリを使用したやり取りがまだ定着してはいないため、時間が掛かってしまうのではないかと感じている。 音声言語の代替手段ややり取りの充実という面では、練習の時間や、関わり手が意識してiPadを使用したやり取りを行う必要があると思われる。また、生徒のよく行うやり取りや要求、質問などを、「しゃべって」に登録しておき、簡単に再生して相手に伝えられるようにしておくことで、生徒からのより自発的なやり取りを広げたい。